

茶漬けの味もわかるチェコの日本通

——一九二六年の日本新聞にみる旅行家J・ホロウハの肖像——

ブルナ・ルカーシュ

一、はじめに

一九〇六年に初めて日本を訪れたチェコの旅行家、小説家、美術品収集家のジョエ・ホロウハ (Joe Houcha, 一八八一—一九五七) は、一九二六年の夏、約二〇年ぶりに再来日を果たした。初めて来日した時の彼は母国の文壇に登場してまもなく、エキゾチシズムに魅かれていた一部の読者に知られるのみで無名の作家だったが、再来日の時点では、ジャポニズム小説や随筆集、怪談再話集などを八冊も出版し、講演や新聞雑誌の誌面でも活躍する「日本通」の作家として知られていた。⁽¹⁾ このように異色の経歴を持つホロウハが、到着早々、日本のメディアに注目されたのもさほど不思議ではあるまい。

本稿では、ホロウハが二度目の来日を果たした一九二六年に日本の新聞に掲載された記事に着眼し、それまでの活躍や日本滞在中の動向、ホロウハの「日本観」がその中でどのように記述されているかを検討する。従来注目されてこなかったこれらの記事を調査することで、訪日中のホロウハの動向をより正確に捉えると同時に、ジャポニズムに感化された一九世紀末〜二〇世紀初頭の西洋の旅行家や著作家について、同時代の日本メディアではどのような言説が構築されていたのか、というより大きな問題の一端を垣間見ることもできよう。

二、ジヨエ・ホロウハというジャポニズム作家

一九世紀末、それまで主に西ヨーロッパで人気を博してきた日本趣味が、中欧のチェコ美術界でも頭角を現しはじめた。一八七三年のウィーン万国博覧会の影響もあり、日本の美術品や工芸品は人々の生活空間を彩る装飾品として好んで使われるようになった。文学世界においてもこのような新しい嗜好がみられた。外国人作家によるオリエントをめぐる旅行記は一八八〇年代から盛んに翻訳されていたが、一八九〇年代以降はJ・コジエンスキー (Josef Kovenský, 一八四七—一九三八) やE・S・ヴラーズ (Enrique Stanko Vráz, 一八六〇—一九三二) らチェコの旅行家たちが来日し、帰国後、旅行体験を書きつづけた様々な著作を盛んに出版した。未知なる世界への扉をひらくこれらの書物によって拡散される情報は読者の想像力を強く刺激し、日本が注目される気運の醸成に大きく寄与した。

日本をふくめ異国の文化の紹介において一翼を担ったのは、多く旅行家を経済的に支援し、世界各国の資料収集に心血を注いだV・ナープルステク (Vojtěch Naprstek, 一八二六—一八九四) によって設立され、今もプラハ市の中心街に現存するナープルステク博物館である。来日の経験がない詩人のJ・ゼイエル (Julius Zeyer, 一八四一—

一九〇一) が本館の図書室に所蔵される日本関連の資料をもとに、名作『ゴンパチとコムラサキ』(3) *Compači a Komurasaki* (Přaha: Eduard Valečka, 1884) のようなジャポニズム小説を執筆したことが、この機関が果たした役割の重要性を如実に物語っている。ゼイエルの小説に感化され、生涯を通して「幻の日本」を追い求めた作家ジヨエ・ホロウハもまた、青年の頃にこの博物館に熱心に通い、日本の歴史や文化への造詣を深めた。

本名の「ヨゼフ」ではなく、文壇登場から晩年に至るまで「ジヨエ」というペンネームを使いつづけたホロウハは、中央ボヘミア州のポトコヴァーニ醸造所で、醸造監督の子として生まれた。のちにプラハの聖トマーシュ醸造所を借り入れた父は、四人の子息のうちの誰かにその事業を引き継ぐことを強く望んだが、三男のヨゼフは子供の頃から文学に親しみ、チェコの冒険文学作家であり、SF文学の先駆者としても知られる兄カレル (Karel Houcha, 一八八一—一九五七) とともに短編小説や人形劇の脚本を手掛けるようになった。高等学校を経てプラハの商業専門学校で学んだのち、カレル大学で会計学を聴講したが、感性和想像力の豊かな青年であったホロウハは、無味乾燥な数字の世界にいつさい関心を持たなかった。高校時代にA・ヒューブナーの『世界周遊記』 *Procházka kolem světa* (Přaha: Fr.

Šimáček, 1880) や A・ブラッシーの『世界一周「サンビー
ム号」の旅行』*Kolem světa: výlet po loži Sunbeamu* (Praha:
Libuše, Matice zábavy a vědění, 1883) 母方の従伯父に
あたる J・コジエンスキーの旅行記『日本』*Cesty po světě
- Žaponsko* (Praha: J. Otto, 1899) などに触発され、異国
文化に憧れを抱くようになり、ナーブルステク博物館に足
繁く通った。

ホロウハはヨーロッパや北アフリカなど世界各国を旅し
たが、生涯を通じて変わらぬ憧れの的だったのは、他でも
ない日本である。一九〇六年に初めて日本を訪れたが、既
にそれ以前に、短編小説「因縁」*Karma* (『世界図絵
』*Ilustrovaný svět*) 一九〇四・三・一、一八) や「津波」
Zlúpa (『チェコの世界』*Český svět*) 一九〇五・六・九—
九・八、翌年に単行本化)⁴⁾ 長編小説『風前の桜』*Sakura ve
vichřici* (Praha: Jos. R. Vilímek, 1905) など、日本を舞台
にしたジャポニズム小説を複数発表している。

「日本旅行記の一断片」という副題を付して刊行された
『風前の桜』は、明治期の東京を主な舞台として、語り手
をつとめるチェコの旅行家の「私」と日本人女性の悲恋を
描いたセンチメンタルな物語である。東京を散策しながら
日本の美術品を買い集めることを日課とする「私」は、下
宿先が火事で全焼したため、象牙の美術品を取りあつかう

商人スズキの家に間借りすることになり、その娘サクラと
知り合う。

その日の残りを古本屋や骨董品の店で過ごした。馬琴、
西鶴、春水、徳太郎などこの国の文学と、日本に多く
ある、武器や造園、瓦の形とその製造法、生花や着物
の布地、弓道や薙刀をめぐるさまざまな学術書も大量
に買って帰った。

荷物を車から家に持っていくとき、サクラが私を驚か
せた。

「私も文学に関心があつて、あなたと同じくらい文学
が好きです。」

「それならきつと私の勉強を手伝ってくださいね。」

二人はすぐに意気投合し、毎日のように街中を歩いたり、
「私」が買ってきた美術品や書物を調べたりしながら恋に
落ちていく。しかし、両親が異国人との関係に強く反対し、
絶望したサクラは、自死してこの世を去る。

彼女は私のために死んだ。私の妻になれなかったから
死んだ。私のことが好きだった彼女を、私は追うべき
だろうか。彼女のもとに行くべきだろうか。簡単なこ

とだろ——勇氣さえあれば。だが、私にはできない。母国の思い出は私を引きとめる。家族の繋累というものの、義理と呼ばれる全てのものを私は呪う。この恐ろしいものがサクラの命を奪ったのだ。

悲嘆に暮れる「私」が東京を離れ、箱根に向かう場面でこの作品は結ばれる。語り手の「私」は日本美術や文化に強い関心を持つ旅行家として設定されており、作中には、浅草観音や上野弁天堂など東京の名所を歩く場面、花見や相撲、歌舞伎の鑑賞を通じて日本文化を色鮮やかに映し出す場面が随所に散りばめられている。若い恋人たちの悲恋物語であると同時に二人を取り巻く文化環境を描くという、この類の小説によくみられる二重構造が本作を一種の観光案内にしていると言える。

一九〇六年一月、既にジャポニズム小説の作家としての地位を確立していたホロウハは、初めて憧れの日本へと出発した。滞在中は、主に大阪、京都、東京を見物し、多数の美術品を買い集め、八月に横浜から帰途についた。帰国後は、この日本滞在を題材に、随筆集『日本回想記』*Vzpomínky na Japonsko* (Praha: F. Šimáček, 1908) や怪談再話集『死神の接吻』*Pohiby smrti* (Praha: Vilímek, 1913) などを出版し、日本文化をめぐる講演も行った。プラハの

中心街に和風喫茶店「ヨコハマ」を開き、蒐集した日本の美術品を出展した展示会を開催するなど、日本文化や美術の知名度向上に貢献する多方面での活動をつづけた。

一九二六年にホロウハは再び日本を訪れ、東京在住のチェコの建築家B・フォイエルシュタインらと交流しながら、東京や大阪のほかに、広島や鹿児島まで足を延ばした。帰国後も、社寺仏閣を巡る『神と鬼を訪ねて』*Mezi bohy a demony* (Praha: A. Neubert, 1929) 、『芸者や花魁など花街を取材した』『微笑みを売る女たち』*Prodačský usměví* (Praha: A. Neubert, 1929) 、『日本の乙女たち』*Japonskéčky* (Praha: A. Neubert, 1931) 、『朗らかなる東方の童話』*Pohádky slunného východu* (Praha: Karel Červenka, 1944) 、『北斎』*Hokusai* (Praha: Orbis, 1949) など、日本関連の著書を数多く出版したが、一九四八年の共産党政権樹立後、活躍を継続するのが困難となり、沈黙を余儀なくされた。三度目の来日を夢見ていたが、それも結局実現することなく一九五七年にプラハで逝去した。ホロウハの美術コレクションは本人の生前に国へ寄贈され、現在はナールブルステク博物館に保管されている。ちなみに、チェコの文豪カレル・チャペックに浮世絵を売ったのもホロウハである。

一九世紀末から二〇世紀前半にかけてのチェコでは、日本を舞台にした小説が多数発表されているが、ホロウハに

よるジャポニズム小説は、ゼイエルに次いで人気を博した。出世作となり、戦後まで一三回も版を改めた『風前の桜』その他の初期作品に映し出される〈日本像〉は、現実の日本を見ないまま読書体験を通じて形成されたが、来日を経ても「古き日本への憧憬」は色褪せることなく、彼が抱いていた〈日本像〉もしくは〈日本観〉もまた大きく修正されることはなかったように思われる。ホロウハはピエール・ロティにも強く影響されたが、『お菊さん』にみられるような幻滅を、彼が経験することがなかっただろう。作中で、西洋と東洋との差異に焦点は当てられていても、批評や批判が加えられることは滅多にない。不変の憧憬こそが異質な二つの世界を近づけ、深淵をわたる架橋となったのだから。

三、日本メディアにおけるホロウハの肖像

以下、ホロウハが来日した一九二六年の日本の新聞に確認できた新聞記事の全文を掲載し、内容について解説を加える。

① 『時事新報』掲載記事

一九二六年八月三日発行の『時事新報』に「宿帳に『保

呂宇波』嬉しく廿年振りでチエツクから 芝居能楽の研究に来たホ氏 梅幸幸次郎知つてゐます」という記事が掲載されている。以下、記事の全文を引用する。

宿帳に『保呂宇波』嬉しく廿年振りでチエツクから
芝居能楽の研究に来たホ氏 梅幸幸次郎知つてゐます
チエツク、スロバキヤの日本通ジョーエ ホロウハ氏
が二十年振りで渡来した

×
今度は能楽、芝居に関する著述をする為で、秋の興行を東京で見物する外、日光、京都、奈良、宮嶋、高野山等に遊んで十一月帰国の予定だといふ

×
氏は日本趣味に浸るため、赤坂田町の対翠館に泊り、宿帳にも「保呂宇波」と認めてゐる、ホロウハ氏はいかにも暖かな調子で『私は日本が大変懐かしく、プラーグ郊外の自宅の庭にはお稲荷さんの祠を設けてあります、役者では尾上梅幸さん、松本幸四郎さんを知つてゐます、今度参つて、日本の文化にはすっかり驚きました、日本の活動写真は神戸で見ましたが、アメリカものと遜色ありませんね 日本の活動写真のことも是非書きたいと思つてゐます、何しろチエツク スロ

ヴァキアでは日本の知識がまるでないのですから」と語つた（写真は旅館でホロウハさん）

ホロウハの日記をみると、七月三一日に「昨夕、東京の最も大きな新聞であるジ・ジ・シンポの記者が留守中の私を訪ねてきた。（…）ホテルに帰って、二人の記者の訪問を待った。部屋で私の写真を撮り、様々なメモを取った。やがて友人のスズキが来て、私の話を少し補足してくれた」と、『時事新報』記者の取材について記されている。また、八月三日の日記は「今朝、「ジ・ジ・シンポ」という雑誌に私についてこのような記事があつた」と書かれ、その下に新聞から切り取った記事が貼られている。

二十年振りに再来日を果たしたホロウハの活躍と彼の日本趣味を紹介した記事だが、ここで注目すべきは彼が語つた日本の「芝居能楽」への思いであろう。ホロウハは日本の演劇、とりわけ歌舞伎に強く惹かれていた。来日前に執筆され、明治の東京を舞台にした前掲小説『風前の桜』では、主人公の「私」が愛人とともに中村座を訪れ、歌舞伎を楽しむ場面が設けられている。「京橋区にある明治座という一座に行った。大山將軍の近事から暗示を得た「ホトトギス」という近代的な芝居が上演されていた」（六月一八日付）と、「午後一時半から九時半まで歌舞伎座を訪

れる。二円五十銭。当日の演目は「南都炎上」「助六由縁江戸桜」「勸進帳」「親譲魚屋の茶碗」。尾上菊五郎、尾上梅幸という義理の兄弟である二人の俳優を訪れた。後者からはサイン入りの写真を贈られた。」（同月二二日）と記される日記から、ホロウハが、初めて日本を訪れた一九〇六年にも、日本の演劇に親しみ足繁く東京の一座に通つたことや、歌舞伎の俳優たちとも面識を持つことがわかる。歌舞伎はその後のホロウハの著作物のなかでも頻繁に言及され、小説においても重要なモチーフとして繰り返し用いられている。ピエール・ロティの『お菊さん』に感化され、



『時事新報』に掲載されたホロウハの写真

日本滞在中に日本女性といわゆる「一時婚」を結んだというホロウハは帰国後に「私のお菊さん」*Moje pani Chrysanthema*（『日本回想記』所収、一九一〇年）の一篇を単独出版）という小説を書いたが、この中にも、主人公が歌舞伎の時代物が演じられる一座を訪れる場面が描かれている。

『時事新報』の記者と談話したときも、ホロウハは彼の歌舞伎への思いを語ったに違いない。興味深いことに、その後ホロウハは帝国劇場を訪れ、尾上梅幸と再会している。帰国後に発表された「日本の名優たち」*Najlepsi herci Japonska*（『サロン(Salon)』一九二七・三）のなかで、ホロウハはこの感動的な再会について次のように述べている。

私が初めて日本を訪れ、俳優の尾上梅幸を知ったのは二十年前の事である。あれは昔の東京の歌舞伎座でのことだった。(…)それ以来観る機会に恵まれなかったが、今は尾上梅幸が名声を博している。歌舞伎のもっとも名高い女形の俳優となり、有名な中村歌右衛門でさえ彼には及ばない。今回、日本を離れる前に、再び梅幸を観る機会に恵まれるとは思わなかったが、幸運の女神が微笑んでくれた。帝国劇場では十一月十五日から二つの時代物が演じられ、尾上梅幸、松本幸四郎、

澤村宗十郎、森田勘彌と市村羽左衛門といった同劇団のもっとも優れた俳優たちが出演する。

ホロウハは同月一九日に帝国劇場を訪れ、「通し狂言河内山と直侍」と「時代劇白縫譚」を観劇した。のみならず、帝国劇場の支配人山本久三郎の恩恵により上演前に楽屋へ通され、憧れの名優たちと顔を合わせた。

人気が高く全国で慕われる梅幸が、化粧台の前の座布団に坐り、化粧を整えていた。彼はとても温かく私を迎え、二十年前に彼から記念にもらった写真を見せるととても喜んだ。今日は二つもの演目の女形をつとめるので、演目の写真に筆と墨でサインをしてくれた。楽屋の壁は模様も何もなく、綺麗な神坐と昔の俳優の肖像を描いた浮世絵が貼られた屏風で飾られている。使用人が苦いお茶が入っている茶碗を持ってきた。この有名な俳優は昔の「黄金」時代を思い返し、二十年后もまた会いに来るように言ってくれた。そのころもまだ俳優であることを望んでいるのだ。——その後、事務長に案内されながら他の楽屋にも足を運んだ。どれも尾上梅幸と同じであり、松本幸四郎の楽屋のみ置がなく、西洋椅子が置かれていた。しかし、ここも大

きな神坐は欠かさない。日本の俳優たちもやはり迷信深い。どの楽屋でも親切に迎えてくれた。澤村宗十郎は、今日の演目で共演する二人の息子を紹介してくれた。有名な興行師の息子である森田勘彌はプラハのことを知っていたり、歌舞伎公演でヨーロッパを訪れたいと言っていた。

ホロウハはこの後も晩年に至るまで歌舞伎について言及しつづけ、戦時中も「歌舞伎」*Kabuki*（『世界』(Svět) 一九四二・五・六）という紹介記事を發表している。『時事新報』で挙げられる「今度は能楽、芝居に関する著述をする為め」という目的は充分に遂げられたと言えるだろう。

なお、七月三〇日に東京に到着したホロウハは、まず黒でチェコの建築家のB・フォリエルシユタイン⁽⁶⁾とO・モイジーシエクを尋ねたが、その日の夜、モイジーシエクに案内され、赤坂の対翠館に泊まった。ホロウハはごく一般に「保呂宇波」という当て字を使用し、この字を彫った印鑑は日記や書簡に押されており、『私のお菊さん』ではイラストとしても使われている。日本の活動写真にも関心を持ったホロウハは、帰国早々「日本の映画俳優たち」*Japonští kinoherci*（『サロン』(Salon) 一九二七・一）や「日本映画界より」*Z japonského filmu*（『世界あちち』(Letem

světem) 一九二七・一・二〇)を發表している。

② 『中国新聞』掲載記事

一九二六年九月一日発行の『中国新聞』に「広島は東洋のベニス 褒め千切るチエツクの作家」という記事が發表された。以下、記事の全文を引用する。

広島は東洋のベニス 褒め千切るチエツクの作家

二十八日から広島市中島本町の相生旅館に投宿して巖島見物や鯉城見学に浮身をやつしてゐる外人があるが右はジョーエ・ホロウハ（四五）氏といひチエツク・スロバキアの小説家で氏は二十年前にも来朝して一年ばかり滞在したことあり母国語で日本に関する著書が八種あり内五篇は日本人を書いた小話である氏は大変な日本通でブラーグの郊外にある別荘は日本館と名づけて日本の雑貨、名物等をあつめてゐるが今回の来朝は第九回目の日本に関する著書の材料を得るため芝居や能楽を研究するのが目的だといふが往訪の記者に語る

七月二十七日神戸へ船について東京と日光とだけ見て来ました私は日本趣味が大好きで何処へ行つても日本式の宿屋に泊つてゐますが少しも不自由を感じ

ません二十年前の日本をみてゐる私は今日の日本へ来てすばらしい文化の発達に驚かされてしまつたが日本のムスメさんの体格がスラリと伸びて来たのも目立ちます広島へは初めて、すが思つたより明るくて便利で美しい街です河が沢山あつて水が綺麗なのは羨しいほどですが広島は東洋のヴェニスといつたところがあしますネ

と、なほ氏は更に大阪、京都、奈良を見物して帰る予定だが急がぬ旅で日どりは決めてゐないと

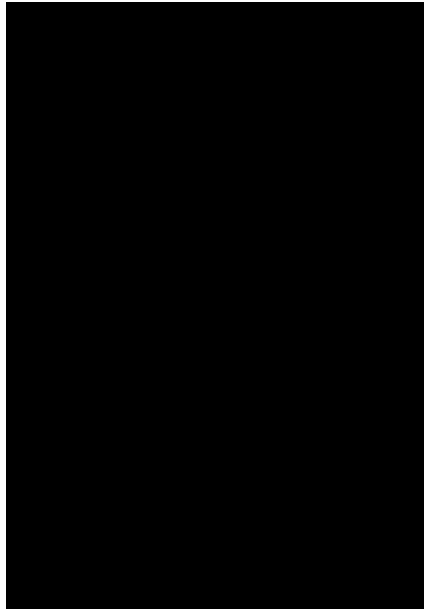
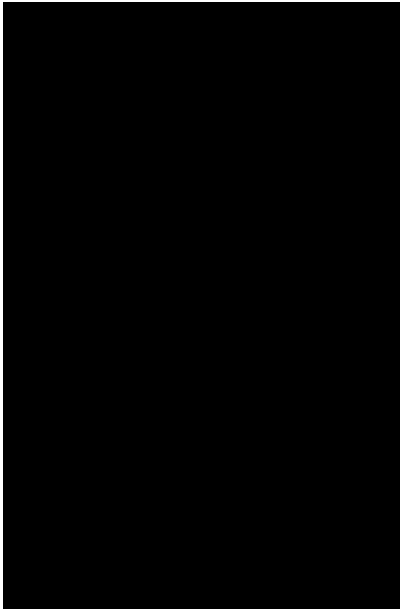
日記によるとホロウハは、一九二六年八月二八日午後五時頃に汽車で広島に到着し、相生旅館に寄宿した。その後、数日間にわたり、ヤマグチという知人に案内されながら広島とその周辺を見物した。八月三〇日、ヤマグチとともに「ひどい暑さ」に耐えながら、広島城、浅野泉邸や饒津神社を巡り歩いたが、ヤマグチの宅で夕食を取つているとき、「地方新聞の記者が現れた。私が取材を受け、ヤマグチが通訳をしてくれた」と日記に記されている。「地方新聞」とは『中国新聞』のことであり、取材をもとにした記事が九月一日発行の同紙に掲載された。さらに、九月一日の午後四時頃、ホロウハはヤマグチとともに中国新聞社の本社を訪れる。社内を見学したのち、「広島の優れた周辺」が



九月二日発行『中国新聞』に掲載された、中国新聞社の屋上で撮影されたホロウハの写真



九月一日発行『中国新聞』に掲載されたホロウハの肖像写真



ヴィラ・サクラの正面階段（左）と庭の稲荷（右）
（1925年の日記、ナールブルステク博物館、Hloucha 8/2）

眺められる屋上にも案内され、ここで写真撮影を行った。この写真は翌日の『中国新聞』に「チエツクの詩人ジヨーエ・ホロウハ氏」という説明をつけて掲載されることになる。『中国新聞』に掲載された記事は、前掲の『時事新聞』と同様、ホロウハの再来日の背景、日本での動向、これまでの活躍の内容や日本文化への興味についてまとめた紹介記事である。再来日の動機については「日本に関する著書の材料を得るため芝居や能楽を研究するのが目的」と、『時事新報』の記事と同じ内容が記されているが、ホロウハの執筆活動についてはより詳しく説明されている。「母国語で日本に関する著書が八種あり内五篇は日本人を書いた小話である」とあるが、創作としては前掲の『風前の桜』、『津波』、『日本回想記』、『私のお菊さん』のほかに、日本語を学ぶために来日したチェコの旅行家が、東京や京都、鎌倉などの名所を歩きながら日本文化に親しみ、日々の印象を母国の愛人に宛てた手紙で書きつづるといふ、ホロウハの初来日に素材をとった書簡体小説『匿名の手紙』*Dopisy neznámého* (Praha: Jos. R. Vilimek. 1923) がある。創作以外は、前掲の怪談再話集『死神の接吻』と『恐怖の東屋』*Pavilion hrůzy* (Praha: Jan Kottk. 1920)、『翻訳童話集』『日本の子供たちのおとぎ話』*Pohádky japonských dětí* (Praha: A. Neubert. 1926) がある。

「大変な日本通で」あるホロウハの日本への「憧れ」の一例として、「日本館と名づけ」られる「プラーグの郊外にある別荘」が挙げられている。『時事新報』でも「私は日本が大変懐かしく、プラーグ郊外の自宅の庭にはお稲荷さんの祠を設けてあります」とある。ここでホロウハが語っているのは、一九二四年にプラーハ近郊のロストキ村に建てられた和洋折衷の邸宅「ヴィーラ・サクラ」のことである。^⑦不運なことに、再来日の支出もあつて一九二〇年代後半に窮状に陥ったホロウハは、結局この邸宅を手放すほかなかったが、現存する写真からは、建物の外観や庭に小さなお稲荷さんの祠があつたことも確認できる。

「日本の雑貨、名物等をあつめてゐる」という記述も、ホロウハの活動の重要な面を捉えている。ホロウハは、一九〇六年と一九二六年の日本滞在中に、浮世絵をはじめ日本の美術品を多数購入し、また、ヨーロッパでもウィーンやベルリンに出向き、多くの作品を入手している。^⑧早くも一九〇七年一月にプラーハで日本の掛物の展示会を開催したホロウハはその後、日本美術の専門家として認識され、国内外で数多くの展示企画に参画した。

③ 『大阪朝日新聞』掲載記事

一九二六年九月一三日発行『大阪朝日新聞』（朝刊）に「茶

漬の味もわかつてゐる チエツコ随一の日本通来る」という記事が掲載された。以下、記事の全文を引用する。

茶漬の味もわかつてゐる チエツコ随一の日本通来る

◇大阪で作つたといふ長さ一尺三寸、横巾七寸の大きな下駄をはき浴衣がけて仁王様のやうな散歩姿に明治四十年ころ当時の鎌倉人士をあつといはせたオーストリーハンガリー人ジヨエ・ホローハ（四十五）君が二十年振りで吾国に再遊し十二日午後本社を訪問した◇ホローハ君はプラーグ大学文科の出身で、日本の芸術に大きな憧れを持ち千九百六年渡日してすっかり日本礼讃党になり『ぶゞづけにヒネ沢庵』の味もわかつて今では日本人を妻君に持ちたいのが唯一の願望とある

◇プラーグ市でも相当知られた文士で日本に関する著書も『桜子』『津波』『化物屋敷』『昔噺』など七冊に及び同地に「横浜カフェー」といふ竹の柱にかやの屋根、南天の支柱、春日灯籠といった純日本式喫茶店を経営し、スラーブ婦人に文金の高島田、銀杏返し、桃割など日本鬻に結わせて緑茶の市価を高からしめチエコスロバキヤ国随一の日本通である

◇今回乗朝の目的は『能と芝居』の著述のため、近

くチエコスロバキヤ行使のシバグロブスキー博士と京都で落ち合つて筑紫路遍路に上るといふ〓写真はホローハ君

「日本通」や「日本の芸術に大きな憧憬」、「日本礼讃党」などの表現が散りばめられた、ホローハの「親日」性を前面に出した記事である。

冒頭の一段落にある服装についての記述にはやや誇張があるように思われるが、日本滞在中のホローハがしばしば和服をまといっていたのは確かであり、和服姿が映し出され



九月一二日発行『大阪朝日新聞』に掲載されたホローハの肖像写真

た写真もある。また、ホローハの国籍がオーストリア・ハンガリーとされているのは、一九一八年に独立を勝ち取ることとなるチエコスロヴァキアが、彼が初めて日本を訪れた一九〇六年にはまだオーストリア・ハンガリー帝国に属していたためだろう。

記述内容について、さらにいくつか補足説明が必要である。まず、本人はブラハのカレル・フェルディナンド大学（現カレル大学）の文学部を卒業したことが示唆されているが、じっさいは聴講生として複数の講義を履修するのみで、正規の学生として大学に籍を置いたことはなく、同大で学位を得たわけでもない。

また、ホローハ自身は、一九〇六年に来日した時、愛読したロテイに倣い「一時婚」を結んだと自著で記しており、その後の著作のなかでも日本の女性、ことに芸者への視線が濃厚に表現されているが、旅行日記などをみるかぎり、二度目に来日した一九二六年に日本人女性との結婚を本格的に検討していた形跡はない。「日本人を妻君に持ちたいのが唯一の願望」という記述は、ホローハが言った冗談を本気にしてしまったか、彼の「親日」性を強調しようとした記者による脚色の可能性もある。

前述のように、ホローハは初来日以前より日本を舞台とした小説を執筆しているが、ここで言及される『桜子』は



和服を身に纏う初来日の頃のホロウハ
（『チェコの世界 (Český svět)』一九〇六・七・一三)

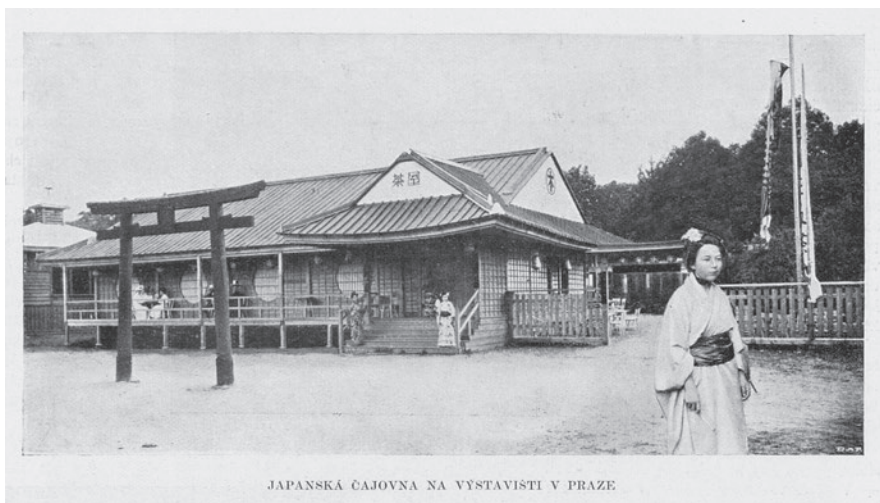
『風前の桜』、『化物屋敷』は『恐怖の東屋』、また『昔噺』は『日本の子供たちのおとぎ話』のことであろう。

「横浜カフェー」という「純日本式喫茶店」は、ホロウハがプラハで経営した喫茶店のことである。一九〇八年にプラハで商工会記念展覧会が開催されるにあたって、ホロウハは兄とともにその会場に和風飲食店「茶屋」を開店した。展覧会終了後にプラハの中心街にあるルツェルナ宮殿に店を移し、「ヨコハマ」と改名した。『大阪朝日新聞』の記事にも記されるように、着物を身に纏うチェコ人女性たちが客の接待に当たるなど、異国情緒が濃厚に醸し出されたこの店は、芸術家や文化人なども集まる文化施設となった。

ヨゼフ・シュヴァグロフスキー (Josef Švagrovský、一八七八—一九四三) は、第一次世界大戦中にロシアで結成されたチェコスロヴァキア軍団の元兵士であり、戦後は外交官となつて一九二三年から一九二八年まで駐日チェコスロヴァキア公使をつとめた。

四、まとめ

大正期・昭和初期の日本の新聞雑誌を通覧してみると、日本在住の外国人に加えて、何らかの理由で日本を訪れた



商工会記念展覧会に開かれた「茶屋」(『チェコの世界 (Český svět)』一九〇八年八月)



着物を身に纏う「茶屋」の女給仕たち(『チェコの世界 (Český svět)』一九〇八年八月)

外国の著名人の略歴や日本滞在中の動向が詳らかに紹介される記事が増えていく傾向があるように思われる。日本を訪れる外国人の数が年々増えていくなか、日本文化や美術に関心を持って来日したという旅行家たちも少なくなき、日本のメディアは、外国人の「日本観」を、読者に歓迎される有力なテーマとして意識しはじめ、来日した外国人に焦点を合わせたのだろう。これらの紹介記事の特徴としては、外国人の日本に対する「憧れ」や「親日」といった好意的評価がときに滑稽なほど強調され、現在の報道では標準的な客観性や批評精神に乏しかった、という点を指摘できる。おおむね一九世紀末以降の西洋のジャポニズムによって涵養された外国人の「日本観」はこのようにして輸入され、日本の読者たちに届けられたわけである。やや大げさな言い方かもしれないが、「親日」性に力点を置くこれらの記事には、読者に日本文化の特異性・優越性の意識を育み、ナショナリズム思潮を助長させる戦略が認められる、と言えなくもない。

一九二六年、二〇年振りに再来日を果たしたホロウハは、日本のメディアで大きな注目を浴び、日本国内を旅行したときは、大手の『時事新報』のほかに、『中国新聞』や『大阪朝日新聞』といった地方紙にも紹介記事が掲載された。これらの記事でもやはり「親日」を基盤とした「日本観」

が前面に押し出されている。しかしホロウハの場合、このような一見して偏頗な見方が提示されるのも無理のないことだと言わざるをえない。初来日の一九〇六年から再来日の一九二六年までの二十年の間、ジャポニズム小説や日本文化や美術の紹介記事を多数執筆し、間断なく日本の美術品や工芸品を収集した、日本への懐かしさのあまり和洋折衷の邸宅を建て、また「純日本式喫茶店」まで開いたホロウハは、現代社会の暗面や複雑な国際事情から目をそらし、古き日本の詩情を永遠に追い求め、永遠に詠いつづける、いつてみれば、日本への「憧れ」を一種のトレードマークとした、真の「親日」作家であった。

最後にもう一つ付記しておこう。一九二六年八月三日発行の『東京朝日新聞』には「二名の外人要さいを撮影 自動車で横須賀軍港へ乗付け巧みに逃走 大々的に行方を捜査」という記事が掲載されている。内容をみると、「一日午後十一頃横須賀軍港第一区要さい地帯なる同市内大津海岸まで自動車に乗つけた二名の外人が海面に向つて数ヶ所の撮影をなし三崎街道を逃走したので憲兵分隊では直に自動車で追跡逗子まで来たが遂に影を見つた」と記されている。八月一日は日曜日で、ホロウハはこの日、公使館に勤める知人のルージチュカ氏とその妻とともに自動車で横須賀、葉山、逗子、三崎をめぐり、三崎海岸で海水浴を楽し

んでから、鎌倉で大仏を見物して東京に戻ったと日記に記している。八月三日の日記には「新聞に、禁止令に違反して横須賀で写真撮影を行った旅行家が自動車で逃走し、警察が追いかけるも失敗、という扇情的なニュースがあった。あれはきつと日曜日に遠足に出かけた私たちであったに違いない」と、ホロウハがなかなば面白そうに書き残している。もちろん確証はないが、来日早々のホロウハははからずも、世間を騒がす新聞種となっていたのかもしれない。

【注】

(1) 大正期・昭和初期に日本の新聞雑誌で注目を浴びたチェコスロヴァキア出身の旅行家としては、B・M・エリアーシヨヴァーやB・フイケイズロヴァーなどを挙げることもできる。一九二〇年―一九二一年に東京のチェコスロヴァキア公使館の事務職員をつとめ、日本の新聞雑誌に母国の文化を紹介した記事を寄稿したエリアーシヨヴァーが、再来日の際に注目されたのは決して不思議なことではない。一九二三年に来日した際に、「美しい日本に魅せられて はるぐく来朝したチエツクの女記者―活花、しほり染等を習ひながら女工の研究」(『アサヒグラフ』一九二三・六・二九)が掲載され、最後の来日を果たした一九二九年には「日本の春を語る チエツコの親日

著作家エリアシオワ女史」(『国民新聞』一九二九・四・一五)が掲載されている。一九三五年に世界一周の旅行を実施した際に日本を訪れた動物学者J・パウムとその妻B・フイケイズロヴァーも注目され、「国際蜘蛛助の旅 チエツコの動物学者夫妻が採集車を運転・入京」(『東京朝日新聞』一九三五・一〇・一)など、その動向を紹介する記事が複数確認できる。

(2) 日本を訪れたオーストリアの元外交官のA・ヒューブナーの旅行記は『世界周遊記』*Procházka kolem světa* (Praha: Fr. Šimáček, 1880)として、北東航路の開拓で名声を博した生物学者A・E・ノルデンシヨルドの旅行記は『アジアとヨーロッパを巡るヴェガ号の航海』*Plavba lodi kolem Asie a Evropy* (Praha: Fr. Šimáček, 1882-1883)として、イギリスの女性旅行家A・ブラッシーの旅行記は『世界一周「サンビーム号」での旅行』*Kolem světa : výlet po lodi Sunbeamu* (Praha: Libuše, Matěje zábavy a vědění, 1883)として翻訳されている。

(3) イギリスの元外交官アルジャーノン・フリーマン＝ミットフォード (Algernon Freeman-Mitford) 一八三七―一九一六)の『昔の日本の物語』*Tales of Old Japan* (一八七二)に収録された「ゴンパチとコムラサキの恋」と「佐倉の亡霊」という二つの物語を独自に組み合わせ

たもの。物語の再構築にとどまらず、殺人犯として処刑される原作の白井権八を、庶民を苦しめた〈悪女〉を殺し切腹を命ぜられる武士にするなど、日本の題材とゼイエル独自の文学思想が折り重ねられ、まったく新しい物語世界が生み出されている。当時の読者は艶麗で薄幸な佳人として描かれるコムラサキの姿に魅了されたというが、「この国の女性なら、身を売って自堕落するより、むしろ死を選ぶだろう」〔啓蒙 (Oswald) 一八八五年六月〕と、親を救うため自分から望んで遊女になるコムラサキの自己犠牲がキリスト教者の批評家らによって批判されることもあった。

(4) 「津波」は、年若き漁師のサイトと上流家庭に生まれたハルの純朴な恋愛を描いた小説である。娘の愛人の若い身体に惹かれる好色な母親に結婚を反対され途方に暮れる二人だったが、突如として街を襲った津波により多くの人々とともに母親も命を落とし、解放されたサイトとハルは新たな生活をはじめるといふ内容である。

(5) ホロウハは青年の頃から日記を書く習慣を身につけていた。一八九〇年代後半の日記には、後に冒険小説の作家として活躍し、画才にも恵まれた兄のカレルが挿絵を描いており、個人的な記録というより、ホロウハが文学に目覚める過程を垣間見せる、読者を想定したある種の「作

品」として捉えられる。一方、一九二〇年代以降執筆された日記は大型ノートを使用し、ハガキ、写真、パンフレット、新聞記事の切り抜きなどの資料が張り付けられている。一九二六年の旅行記録もこのような大型ノートに書き記されている。なお、これらの日記は現在プラハ市のナープルステク博物館に保管されている。

(6) フォイエルシュタインについては、ヘレナ・チャブコヴァー著、阿部賢一訳『ペドジフ・フォイエルシュタインと日本』(成文社、二〇二一・六)がある。

(7) なお、一九二六年七月三日の日記に、外務省に勤める知人のスズキが、「彼が私の庭についての写真付き記事を掲載した観光雑誌を持ってきた」とあり、親日外国人がプラハ近郊に作った日本庭園というテーマが注目されていたことがわかるが、雑誌名と発表年月は未詳のため現在未確認である。

(8) 日本で買い集めた美術品について、ホロウハは後年、「第一次世界大戦前は、日本の色刷りの版画がときどき幾つか現れるくらいで、プラハの美術市場では日本美術は珍しかった。三十五年も前、日本に初めて滞在したとき、私は色刷りの版画と著作を沢山買い集めることができた。二十年ぶりに再び日本を訪れたとき、市場に出てくる古い美術品はもはや数少なかった。関東大震災後、米

国人が円安を利用して、貧しくなった日本をドルによって存分に荒らした。あの頃、古き日本の宝物をたくさん積んだ貨物船が米国に渡った。それでも私は、彫刻をはじめ優れた仏教美術のコレクションを手に入れることができた。」(「プラハの日本美術」『世界展望 (Světlozor)』一九四一・九・五)と興味深い証言を残している。

(9) 当時の新聞によると、トピチ・サロンとこう画廊で開催されたこの展示では「十七世紀、十八世紀と十九世紀の代表的な芸術家による掛物」(「プラハでの日本美術——

ホロウハ氏による日本の掛物の展示」『時代 (Čas)』一九〇七・一・二四)が多数展示されていた。

(10) ホロウハの来日については一九二六年七月三十一日発行

『Japan Chronicle』と「Among the passengers of the North German Lloyd line "Fulda" that arrived at Yokohama on Friday last was Mr. Joe Hloucha, a well known Czechoslovak man of letters, whose several books on Japan are very popular in Czechoslovakia. Mr. Hloucha first visited this country 25 years ago and recorded his rich experiences and impressions in his books in a very charming manner. The purpose of his second visit to Japan is to study Japanese ancient dances and the Japanese art in general. He will stay in

Japan until November or December.」と、ホロウハの活動と来日目的について記されている。また別の記事では「Mr. J. Hloucha, famous Czechoslovak writer, who has among other things written numerous books on Japan, arrived in Yokohama recently for an extended visit. While in this country he will study Japanese dancing. He will be the guest of Mr. Svager of the firm of Raymond&Sykes while in this city.」と、ホロウハと日本で活躍中のチェコの建築家「J. シュヴァーグル (Jan Josef Svagr, 一八八五年—一九六九年) の交流について記されている。

* 本文に引用されるホロウハの日記や記事の日本語訳は本稿の筆者による。なお、本研究は「SPS 科研費」9KI3142 (研究課題「チェコ女性作家 B・M・エリアーシヨヴァーと日本旅行記・ジャポニズム文学の研究」) の助成を受けたものである。

(ブルナ・ルカーシユ・実践女子大学准教授)